

## 本来の結果構文は本当に結果構文か？

江口, 巧  
九州大学大学院言語文化研究院 : 教授

<https://doi.org/10.15017/4377783>

---

出版情報 : 言語科学. 56, pp.17-25, 2021-03-23. 九州大学大学院言語文化研究院  
バージョン :  
権利関係 :

# 本来的結果構文は本当に結果構文か？

江口 巧

## 1. 序

英語の結果構文は、概ね「動作主による行為の結果、行為の対象物がある変化を被る」という概念を表す構文とされる。そして、構文の性質も一様ではなく、いくつかの基準に基づいた分類がなされてきた。

その中で、主動詞の意味に基づく分類、すなわち、動詞そのものの表す意味に変化結果が含まれるか否かによって結果構文を2つに区分する影山(1996)の分類法が頻繁に採用されている。影山は、以下の(1a, b)に示すように、状態変化動詞の用いられたタイプを「本来的結果構文」、一方(2a, b)のように、主動詞が状態変化を意味しない活動動詞の現れたタイプを「派生的結果構文」と呼んで区別した。

- (1) a. He broke the vase into pieces.  
b. Mary dyed her hair black.
- (2) a. He hammered the metal flat.  
b. They ran the pavement thin.

2つのタイプの結果構文に様々な差異が存在することはこれまでの先行研究でも指摘されており、このために上記のような2分法へとつながったのであるが、しかし、両者の間には、同じ結果構文として扱うにはあまりにも大きい差異が観察されるのは事実である。特に前者の本来的結果構文に関しては、本来の意味での結果構文とするのに疑義をはさむ見解も見られる(影山(2005a), Broccias(2008)、岩田(2009) etc.)。そこで、本稿では、二つのタイプの結果構文に見られる顕著な違いを改めて洗い出し、筆者なりの観点から本来的結果構文を結果構文とみなすことが妥当かどうかを議論する。

## 2. 構文分析

核心の議論に進む前に、本節では、今後の議論の前提となってくる Goldberg (1995)によって提唱された結果構文の構文分析について触れておく。

結果構文、特に上記(2)のタイプの派生的結果構文に関して最も特徴的なことは、まず(2a)において、主動詞の *hammer* 自体は状態変化を意味しないにも関わらず、目的語 *the metal* の変化結果の状態を表す *flat* が現れているという点である。また(2b)においては、主動詞の *run* は自動詞であるにも関わらず、それが選択しない目的語と結果述語の連鎖 *the pavement thin* が生じている。このように、この構文では、動詞の下位範疇化に反する特性が見られる。この問題に対し、Goldberg は「構文」という概念を持ち出し、動詞直後の名詞句や結果述語のもつ固有の意味役割は「構文」によって与えられるとして問題の解決を図った。この分析によると、上の *flat* および *the pavement thin* のように動詞の特性から導かれない要素は、構文の項(argument)であり、構

文から与えられた patient および result-goal といった意味役割をもつことになる。

### 3. 2つのタイプの結果構文の差異

以降、まず本節では、本来の結果構文と派生的結果構文の顕著な違いについて述べていく。

#### 3.1. 結果述語のアスペクト

結果構文は構文全体として完結性(telecity)のアスペクトが要求されるという点では諸学者の意見の一致を見ている。しかし、それを達成する仕組みは両者のタイプで異なっている (cf. 小野(2007))。

まず、(3)に見られるように、本来の結果構文では主動詞が状態変化動詞であり、これにより既に完結性が達成されるため、結果述語のアスペクトには制約が課されない。(3a)が示すように、結果述語の前置詞句は有界的(bounded:「完結的」に相当する)である into のみならず、非有界的な in も容認される。また(3b)では、極点をもたない開放スケールの形容詞 hard が現れており、非完結的なアスペクトをもつ結果句も許されることを示している。

- (3) a. John broke the stick {in/into} pieces. (小野 (2011:131))  
b. I froze the ice cream hard. (小野 (2007: 75))

一方、(4)のような派生的結果構文になると、動詞が状態変化を意味しない活動動詞であるため、文全体として完結性を達成するために、結果述語の方にアスペクトの制約がかかってくる。(4a)が示すように、前置詞の結果述語は into のみしか容認されず、もはや in は許されない。また、(4b, c)の通り、形容詞結果述語は flat, empty など極点をもつ閉鎖スケールの形容詞が要求される。

- (4) a. John pounded the metal {\*in/into} pieces. (小野 (2011:131))  
b. The gardener watered the tulips flat. (小野 (2007: 76))  
c. The bear frightened the campground empty. (小野 (2007: 76))

このように、二つのタイプの結果構文では、結果述語にかかるアスペクトの制約が異なってくる。

#### 3.2. 状態変化を担う要素

両タイプの結果構文に関して無視できない二つ目の相違点は、各構文において、状態変化の表出を担う部分が文のどの要素であるかという点である。

まず、例えば(5)のような本来の結果構文では、動詞の目的語である the vase は他動詞 break が選択する要素であり、結果句の into pieces も、状態変化を表す動詞の語彙概念構造に記載された変化結果(cf. 影山(2005b))をさらに詳述(further specify)したものである。

- (5) He broke the vase into pieces.

従って、このタイプの結果構文は、主動詞の特性をそのまま反映したものであると言え、2節で派生的結果構文に関して述べた構文分析を適用する必要はない。よって、本来の結果構文では、状態変化の表出は状態変化を意味する主動詞が担っていると見なすことができる。

一方、(6)のような派生的結果構文では、主動詞 pound は打撃動詞であり、into pieces が表す「断片に分かれた」状態は動詞の語彙概念構造には記載されていない。

(6) John pounded the metal into pieces.

このことは(7)の容認性を見ればわかる。

(7) He pounded the metal, but it did not break.

では、(6)において状態変化の意味はどこから生じるかという点、完結性を表す結果句 *into pieces* を伴った結果、構文全体として、活動事象が変化結果事象への移行を引き起こす解釈が生じることになる(cf. 江口(2012))。つまり、それ自体状態変化を意味しない *pound the metal* という行為が、金属が *in pieces* の状態になる変化を引き起こすという解釈を生み出すのは構文である。2節で派生的結果構文に構文分析が適用されるとしたゆえんである。<sup>1</sup>

### 3.3. 結果述語は必須の要素か

二つのタイプの結果構文は、結果述語が文の容認性を保つのに必須の要素であるかどうかという点でも異なっている。

まず、本来の結果構文は(8a, b)に示すように、結果述語の付加は義務的ではなく、省略されても文として成立する。

- (8) a. He broke the vase (into pieces).  
b. She dyed her hair (black).

一方、派生的結果構文の方は、結果述語がないと非文となるものがある。<sup>2</sup>

- (9) a. She cried her eyes \*(out).  
b. He danced his feet \*(sore).

本来の結果構文の場合、結果述語は、上述した通り、状態変化動詞が意味する変化結果を詳述しているにすぎない。このことから、今仮に(8a) (*into pieces* を含む形式) の概念構造を設定すると以下のようなものが想定される(cf. 江口(2012))。

- (10) [x CAUSE [y BECOME [y BE AT BROKEN]]]

|  
IN PIECES

この概念構造では、結果述語が表す結果状態 *IN PIECES* は、*BROKEN* に付加的に添えられた形で示されており、この概念構造で本質的な要素であるとは言えない。従来の研究では、(8)のタイプは結果述語を伴って初めて結果構文というステイタスが想定されているが、となると、本来の結果構文の概念構造は、常に(10)のような付加的な要素を伴った概念構造が想定されることに

---

<sup>1</sup> このことから、本来の結果構文と派生的結果構文を江口(2012)に倣って、「語彙的」vs.「構文的」の対立とみなすこともできる。Iwata(2008)も同様の見解を取っており、二つのタイプの結果構文に対し *verb-based* vs. *ASC (Argument Structure Construction)-based* という区分をしている。

<sup>2</sup> 以下のような派生的結果構文は、結果述語がなくても文として容認される。

- i) He hammered the metal (flat).  
ii) He shot the bear (dead).

なる。<sup>3</sup> この不自然さを解消するためには、むしろ、(8)のタイプの構文を結果構文とは見なさずに、単に状態変化動詞を基盤とする状態変化表現とする分析が考えられよう。そして、この場合、このような状態変化表現の概念構造として(11)のような統一的な構造を設定する。そして、この概念構造では、変化結果を詳述する結果句が存在するか否かの違いは、付加的に添えられた要素の有無に反映されるのみとする。

(11) [x CAUSE [y BECOME [y BE AT BROKEN]]]

このように、(8)のタイプの表現については、結果句が存在する場合を結果構文とし、存在しない場合は結果構文ではないとする分析では、想定する概念構造に不具合が生じるため、結果句の有無に関わらず同じ状態変化の表現と見なす方が簡潔さを目指す理論としては望ましいと思われる。

### 3.4. 構文全体の意味は合成的か

本来の結果構文が本当の結果構文と言えるかどうかの議論において、最も重要な判断基準となるのが、両タイプの構文全体の意味は合成的(compositional)か—すなわち、構文全体の意味が個々の要素の意味の総和となるかどうか—という点であると思われる。

本来の結果構文は、3.2節で述べたように、実質的にその構造の基盤をなすのは状態変化動詞であり、統語的には状態変化動詞の句構造パターンがそのまま投射されていると言え、意味的にも、動詞を取り巻く「(状態変化の)使役主」、「対象」、「変化結果」といった意味要素の総和がそのまま構文全体の意味となっている。

一方、例えば、以下の(12)の派生的結果構文において、個々の要素の意味—「彼女」「泳ぐ」「水着」「ぼろぼろに」—を合成させても意図された全体の意味には到達しない。そうではなく、「彼女が(繰り返し)泳ぐ」という行為が使役主となり、「水着がぼろぼろになる」という結果状態が引き起こされるといったように、CAUSE や BECOME といった個々の構成要素にはない意味述語が補われなければならない。そして、このような解釈に導くのが構文の役割である。派生的結果構文では、全体の意味は個々の構成要素の総和とはならないのである。

(12) She swam her swimsuits to tatters.

派生的結果構文への構文分析を提唱した Goldberg(1995)は、構文を「形式もしくは意味のある側面が、それを構成する要素もしくは既に確立した構文からは予測できないような形式と意味のペア」(p. 4)と定義している。Goldberg は後の論考(2004, 2006)において、構成原理に従う(=全体の意味は個々の意味の総和である)ものであっても構文と見なすという見解に変更しているが、彼女の当初の構文の定義に従う立場を取るならば、派生的結果構文こそが構文の資格を有するものであることは明らかであろう。あるひとつの構文はそれ全体として、他の構文には共有されない独自の意味機能を有しているのである。例えば、以下の二つの文は、個々の構成要素を見れば同じ統語範疇の要素が並んでいる。

---

<sup>3</sup> かとって、本来の結果構文に付加的な要素のない i) のような概念構造を想定すると、これは、He broke the vase. のように結果述語のない、単に状態変化動詞が主動詞である文をも含むことになり、この結果、本来の結果構文に固有の概念構造が設定できないことになる。

i) [x CAUSE [y BECOME [y BE AT BROKEN]]]

(13) She shook her husband awake.

(14) She ate the shrimp raw.

それぞれの文の動詞句に目を向けると、いずれも“動詞 + (目的語)名詞句 + 形容詞”という連鎖である。しかし、それぞれの意図された解釈に正しくたどり着くためには、単に個々の語の総和を見るだけでは不可能である。それぞれの解釈の過程の詳細は省くが、解釈する側は全体を見て初めて意図された解釈に到達できるのであり、その際に参照されるのが構文である。これにより、(13)では文末の形容詞が結果述語であり、一方(14)では描写述語という解釈がなされる。主動詞が選択する部分のみでなく、全体としての構文に目を向けることの重要性がこの例からも明らかである。

その点、本来的結果構文では、その解釈にたどり着くのに、上記の意味での構文を参照する必要はなく、単に主動詞とそれに関わる要素を参照すれば十分である。

以上のような見方をすれば、構文と呼ぶにふさわしいのは派生的結果構文の方であって、本来的結果構文はその資格を有しないことは明白である。なお、同様に本来的結果構文を結果構文とすることに疑義の見解を述べている先行研究に影山(2005a), Broccias(2008)、岩田(2009)<sup>4</sup> などがある。その中で、岩田は、「そもそも結果構文が注目されるきっかけとなったタイプを「派生的」と呼び、その後2次的に注目されるようになったタイプを「本来的」と呼ぶことは寧ろ本末転倒とさえ言える...若手研究者の間で「本来的」対「派生的」を「主」対「副(従)」のように誤解している者がしばしば見受けられる。ことの本質を見誤らせるような名称は避けるべきであろう」(p. 179)と述べ、この問題に対してかなり厳しい態度を表明しているのが目を引く。

### 3.5. 変化結果事象の容認性を支える要因—意味論的 vs. 語用論的

両タイプの結果構文の差異に関して指摘すべき最後の点は、変化結果事象の容認性を支える要因が意味論的要因か語用論的要因かという点である。

まず、本来的結果構文の場合、変化結果を表す結果述語として容認されるのは、主として、主動詞が表す変化結果をさらに詳述する要素である。これらは動詞の語彙概念構造に記載された変化結果であり、このことから、変化結果は主動詞から意味論的に導かれたものであると言える。

(15) a. He broke the vase into pieces.

b. She dyed her hair black.

これらの結果述語を動詞の語彙概念構造に記載されない要素に置き換えると著しく容認性が下がる。

(16) a. ??He broke the vase into combined blocks.

b. ??She dyed her hair cold.

一方、変化結果が動詞の語彙概念構造に含まれない派生的結果構文の場合、影山(2005a, b)は、動詞の表す行為が結果述語の表す状態を達成する意図をもって行われたものほど容認性が高くな

---

<sup>4</sup> これらの研究者は、結果述語が動詞の語彙的な意味から含意されないものを本当の意味での結果構文と見なす点では共通している。そして、この中で特に「構文」を意識した説明を施しているのは岩田(2009)である。

るとして、以下のような例を挙げた。

- (17) a. The wise dog barked his master awake to warn him of the fire.

(影山 (2005a: 131))

- b. \*A stray dog in the distance barked the sleeping child awake.

(影山 (2005a: 131))

- c. \*?She swam her swimsuit to tatters.

(影山 (2005b: 92))

(17a)に描かれた犬の方が(17b)よりも眠っている人を起こすという意図をもって吠えたことは明らかである。また、(17b, c)の結果述語は、動作主の行為により偶発的に生じた結果状態を表しており、動作主による行為の変化結果達成の意図は欠如している。影山は、その達成を意図されて生じた変化結果は、動詞のクオリア構造の「目的役割」に含まれるものとして、語用論的情報であると見なしている。本稿での議論に沿った言い方をすれば、派生的結果構文は、動詞の意味と結果述語が表す意味との間に語用論的なリンクがある場合に容認されるということになる。

しかし、上記の議論が示唆するように、行為者に変化結果達成の意図がない場合には派生的結果構文は容認されないかというのではなく、変化結果が偶発的に生じた場合にもある一定の制約の下で容認される。この場合の制約とは、派生的結果構文に描かれる行為事象と変化結果事象とが何らかの因果関係でつながっている必要があるというものである。江口(2018)で論じられたように、我々が日常で生起する諸事象に関して抱く認識の総体を「シナリオ」と定義すると、ある二つの事象が慣習により、あるいは自然な流れの中でそれぞれ原因・結果として連続して生起することが繰り返されると、二つの事象は因果関係のある事象としてシナリオの中で定着し、一連のひとまとまりの事象として認識されるようになる。派生的結果構文でそれぞれ行為事象、変化結果事象として現れやすいのはこのような事象である。つまり、ここでもやはり、行為を表す動詞と結果述語の意味との間に語用論的なリンクが認められる場合に容認されやすいということが言える。

また、このことは同時に、派生的結果構文では、シナリオに存在するという条件が満たされる限り、一見関連性の薄いような事象でも結果構文に現れうるということの意味する。例えば、以下に挙げるような例がそうである。

- (18) You may sleep it quiet again...

(E. Bagnold, *The Squire* cited in Levin and Rappaport Hovav (1995: 36))

- (19) Sleep your wrinkles away.

(Levin and Rappaport Hovav (1995: 36))

- (20) Queen Mum sneezes off visit.

(*Asahi Evening News*, Jan. 28, 2000, cited in 中村 (2004: 15))

(18)は、おなかに赤ん坊がいる女性に対し、「あなたが眠れば(今動いている)おなかの中の赤ん坊もまたおとなしくなるかもしれませんよ」と伝えている文であり、(19)は、それを顔に塗って眠ることでしわが取れることを謳った化粧品の広告である。また(20)は新聞記事の見出しであり、エ

リザベス女王が風邪をひき、予定されていた訪問が取り止めになったという内容を伝えている。<sup>5</sup> いずれの例においても、描かれている二つの事象について、一方の事象からもう片方の事象を容易に想起しやすいとは必ずしも言いにくい面もあるが、シナリオにおいて何とか両者を関連付けることは不可能ではないと言えよう。別の観点から見れば、派生的結果構文は、このように発信者の創造性に基づいて、斬新な事象が描かれる可能性を秘めた構文であり、受信者側にしても、いったんは解釈に戸惑いながらも、解説に成功した場合には大きなインパクトを受ける構文であると言える。そして、これを可能にするのが、派生的結果構文の二つの事象間に認められる語用論的リンクである。これに対し、本来的結果構文が描く事象は、動詞が表す行為と変化結果が意味論的につながりのある事象に限られ、上に述べた意味での創造性には欠けていると言わざるを得ない。

#### 4. 議論—本来的結果構文は本当に結果構文か？

前節までの議論において、本来的結果構文と派生的結果構文の相違点を、一部先行研究を踏まえながら、筆者なりの観点から整理してきた。その結果、そうした相違点が結果構文を二つのタイプに分類する引き金になったとは言え、その差異は両者を同じ結果構文として見なすにはあまりにも大きすぎる程度のものであることが明らかになったと思われる。本節では、これまでの観察を踏まえ、本稿の目標である、本来的結果構文をそもそも結果構文と見なすことが可能であるかについて筆者の見解を述べる。

3節での議論を踏まえた上で、両タイプの結果構文の最も大きな差異として無視できないのは、各文の構成要素が動詞の句構造パターンを投射しているかどうか、そしてそれに伴うそれぞれの文全体の解釈にたどり着く過程であると言える。まず、以下にそれぞれの用例を再度挙げておく。

(21) a. He broke the vase into pieces.

b. Mary dyed her hair black.

(22) a. She shook him awake.

b. Sleep your wrinkles away.

既に繰り返し述べてきたように、本来的結果構文は、状態変化動詞を基盤とし、文の構成要素はすべてその動詞が選択する要素が現れるので、文全体の解釈は各要素の意味を合成することで容易にたどり着く。一方、派生的結果構文は動詞の句構造パターンに沿わない要素が現れており、受信者側としてそれを克服して解釈を達成するためには、構文に依存し、各要素に構文から与えられた agent, patient, result-goal といった意味役割を割り当てることによって、正しい解釈を模索する。この過程で構文の役割は欠かせない。

3節で論じた両タイプの差異の中で、「状態変化を担う要素」と「構文全体の意味は合成的か」という点について、その差異を生み出す要因を探れば、結局ここに行きつくことになる。そうすると、二つのタイプの結果構文のうち明らかに有標的と言える派生的結果構文を特徴づける最大

---

<sup>5</sup> 本来であれば、例文(20)は Queen Mum sneezes (her) visit off. という語順であるかと思われる。この場合に、結果述語が文末にきた結果構文と見なすことができる。



の要素は、まぎれもなく「構文」とであると言える。そして、その特異性は、構文を構成する個々の要素に由来するものではなく、構文全体としてもつ独自の構造的および意味的な特性にある。となると、その特異性を際立たせる形で結果構文の分析を行おうとすると、Goldberg(1995)が構文に関して最初に提唱した「形式もしくは意味のある側面が、それを構成する要素もしくは既に確立した構文からは予測できないような形式と意味のペア」という定義に沿ったアプローチをするのがたどるべき方向性であると考えられる。そうすることにより、他の構文とは異なる特性をもつ結果構文をより特徴づけた分析が可能になると思われる。となると、構成原理に従う本来の結果構文はもはやこの特異性からは逸脱しており、本当の意味での結果構文としての資格を失ってしまうことになるのである。

既に 3.3.節では、本来の結果構文に関して、これまで状態変化動詞が表す意味を詳述した結果句を伴って初めて結果構文として扱われてきたため、このことから生じる概念構造上の問題点を指摘した。そして、同時にこの理論的不具合は、本来の結果構文を、単に状態変化動詞を核とする状態変化の表現と見なすことで解決されると論じた。

そこで、前の段落での議論と合わせ、本稿では、結果構文としての本来の資格を有するのは従来の分類での派生的結果構文の方であり、一方、本来の結果構文はもはや本当の意味での結果構文とは言えず、状態変化動詞を基盤とする状態変化表現であるとする立場を取ることになる。

## 5. 結語

影山(1996)は、結果構文を主動詞の意味に基づき、動詞の表す意味に変化結果が含まれるか否かによって2つのタイプに区分し、このうち、状態変化動詞の現れるタイプを本来の結果構文として分類したが、本稿では、このタイプの構文を結果構文とすることが妥当であるかどうかについて論じることを主眼とした。

まず、2節で、主動詞の選択しない要素が現れるという派生的結果構文の問題に対し、Goldberg(1995)の提唱する「構文分析」を概観した。

次に3節では、本来の結果構文と派生的結果構文の相違点を整理した。ここでは、結果述語に課されるアスペクトの制約、両構文で状態変化の表出を担う要素、結果述語が文の必須要素であるか、構文全体の意味が合成的か、変化結果事象の容認性を支える要因が意味論的か語用論的かといった観点から論じ、その結果、両者の無視できない相違点が改めて浮き彫りとなった。

4節では、特に両構文の間で重要な違いは、文の各要素が主動詞の句構造パターンを反映しているかどうかであり、これに沿っていない派生的結果構文において正しい解釈に行き着くために「構文」の役割が重要であることを再確認し、また同時に、個々の要素からは導かれることのない構文全体としての構造的・意味的特性が結果構文を最も特徴づける要素であると論じた。そして、このような観点から見ると、結果構文の分析は「それを構成する要素もしくは既に確立した構文からは予測できないような形式と意味のペア」という構文の定義に基づいて行うことが妥当であるとした。そして、この定義のもとでは、本来の構文としての資格を有するのは派生的結果構文の方であり、一方の本来の結果構文はその性質はすべて主動詞の特性に由来することから、もはや構文としての資格を失い、むしろ状態変化動詞を核とする状態変化表現であるとする分析

がふさわしいと結論づけた。

## 参照文献

- Broccias, Cristiano (2008) "Towards a history of English resultative constructions: the case of adjectival resultative constructions," *English Language and Linguistics* 12.1, 27-54.
- 江口 巧 (2012) 「結果構文のアスペクト」『九州英文学研究』第 29 号, 13-21, 日本英文学会九州支部.
- 江口 巧 (2018) 「修辭的効果をもつ結果構文」『英語英文学論叢』第 68 集, 49-70, 九州大学大学院言語文化研究院英語科.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Goldberg, Adele E. (2006) *Constructions at Work: The Nature of Generalization in Language*, Oxford University Press, Oxford.
- Goldberg, Adele E. and Ray Jackendoff (2004) The English Relative as a Family of Constructions, *Language* 80, 532-568.
- Iwata, Seiji (2008) "A Door That Swings Noiselessly Open May Creak Shut: Internal Motion and Concurrent Changes of State," *Linguistics* 46, 1049-1108.
- 岩田彩志 (2009) 「2 種類の結果表現と構文理論」『結果構文のタイポロジー』小野尚之(編), 171-216, ひつじ書房, 東京.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点』くろしお出版, 東京.
- 影山太郎 (2005a) 「結果構文・結果複合動詞の算出と解釈」『現代形態論の潮流』大石強・西原哲雄・豊島庸二(編), 115-134, くろしお出版, 東京.
- 影山太郎 (2005b) 「辞書的知識と語用論的知識—語彙概念構造とクオリア構造の融合にむけて」『レキシコンフォーラム』No.1, 影山太郎(編), 65-101, ひつじ書房, 東京.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, MIT Press, Cambridge, MA.
- 中村芳久 (2004) 「主観性の言語学：主観性と文法構造・構文」『認知文法論 II』シリーズ認知言語学入門第 5 巻, 中村芳久(編), 3-51, 大修館書店, 東京.
- 小野尚之(2007) 「結果述語のスケール構造と事象タイプ」『結果構文研究の新視点』小野尚之(編), 67-101, ひつじ書房, 東京.
- 小野尚之(2011) 「英語結果構文の固有性と類型的特性」*JELS* 28, 129-135, 日本英語学会.